

フィッツジェラルド『夜はやさし』

— アメリカ近代化の悪夢 —

上野和子

はじめに

フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald, 1896-1940) の作品は、傑作『グレート・ギャツビー』 (*The Great Gatsby*, 1925) の出版から1世紀近くを経て、その評価が高まっている。アメリカ社会に華々しい好景気をもたらした1920年代と恐慌の闇に見舞われた1930年代の間、彼は初期の成功で社交界の寵児となり、やがて、アルコール中毒と妻の精神病院行きという過酷な人生を辿ることになる。同時に、若者たちとフラッパーを描いた彼の作品は30年代以降、顧みられず、その悲劇的な人生は、アメリカの大衆心理の底に沈んでいった。ところが、1950年、バッド・シュールバーグ (Budd Schulberg, 1914-2009) が、フィッツジェラルド夫妻を模した小説『夢やぶられて』 (*The Disenchanted*, 1950) を書いてベストセラーになると、翌年アーサー・マイズナー (Arthur Mizener) による伝記『楽園の向こう側』 (*The Far Side of Paradise*, 1951) が出版され、再評価の機運が高まった。その後、ナンシー・ミルフォード (Nancy Milford) の『ゼルダ』 (*Zelda*, 1970) や、メイフィールド (Sara Mayfield)ⁱ 始め多くの伝記作家が続き、彼の歴史感覚や女性観との関連での研究書などが、フィッツジェラルドの世界を再構築してきた。20世紀末までに、彼は、1920年代の若者文化の旗手であると共に、偉大な伝統を継承するアメリカの小説家と評価されるようになった。

この作家復活の理由はなんだろうか。いろいろ考えられるが、そのひとつには、彼の活躍した1920年代というアメリカ社会と、現在の社会状況が酷似しているからではないか。『21世紀の資本』 (*Le Capital au XXI^e siècle*) を著したトマ・ピケティ (Thomas Piketty, 1971-)ⁱⁱ によると、アメリカ合衆国における所得上位1%の所得が国民総所得に占める比率の推移の表では、1928年と2007年頃の数値が23%を超え、これらの時代で富裕層にっさうの富の集中があったことが理解できる。20世紀の初期と現代の様々な社会的要因を同一視はできないが、富の偏在と経済格差、階級社会など、自由放任主義下の資本主義がもたらしたアメリカ社会の中で、フィッツジェラルドも血を流した人間であった。

フィッツジェラルドは、時代の動きに敏感でフラッパーやジャズエイジという言葉を普及させ、自伝的な4つの小説、多くの短編、そして戯曲などを残した。ストーリーの大筋は恋愛を扱っているが、彼の生い立ちや教育、結婚に絡む経済格差や文化的差異の夢と悪夢が熾烈にまた繊細に描かれている。しかしながら、彼は常に、アメリカの理想や夢を激しく追い求め、それは真摯であるが焼けただれるような渴望の上に成り立っていた。彼の作品は、大志を抱いた傲慢な魂が、現実の手痛い壁に突き当たるとどのようになるかを物語っている。1920年代、アメリカの夢の新たな形態を提示したのが、『グレート・ギャツビー』であるとしたら、アメリカの理想が破壊され悪夢に変質した様を描いたのが、『夜はやさし』 (*Tender is the Night*, 1934) であった。そこには、第一次世界大戦以降、大衆消

費社会の波に吞まれた人々の大規模な倫理観・道徳観の変容があり、人間の欲望と退廃によって、アメリカの偉大な伝統が捻じ曲げられていく過程があぶりだされる。本稿では、変動期の欧米社会とフィッツジェラルドの生い立ちを辿り、小説『夜はやさし』におけるアメリカの夢の滅びを、登場人物の精神科医と女性たち、大富豪の零落から考察する。

1. 1920年代一富の集中と都市の娯楽

1920年代は、大規模な産業革命と都市化の進展があり、その一方で移民に対する排他主義の高まりや、財閥の形成など光と影のはげしく錯綜する時期であった。南北戦争後、アメリカのGDPは毎年4.5%増を記録し、20世紀初頭にはイギリスやドイツを追い抜いて世界一の工業国となった。人々は好況の恩恵を受け、自動車保有数が伸びるとともに、自動車は贅沢品から生活用品に転じた。同様に、都市人口が初めて農村人口を凌ぎ、人々の娯楽が都市型のパーティ、プロスポーツ、映画、自動車に移っていった。New Moneyを手にした者たちは、邸宅や別荘、自動車や服飾に至るまでこれ見よがしに消費し、ソースティン・ヴェブレン(Thorstein Veblen, 1857-1929)の言う顕示的消費(conspicuous consumption)を実践した。多数のアメリカ人が欧州各地を観光し、地中海のリゾートに遊び、芸術作品を買い漁った。また禁酒運動が1917年から1933年まで法制化され、闇の組織が発展し賭博や密売密輸業者が横行した。

『超・格差社会アメリカの真実』(2006)によれば、当時、アメリカ社会における富の集中が激しく、完全な自由放任経済の下で鉄道会社には、自動車交通も未発達のこともあり、カルテル・トラストが横行していた。1901年には、ニューヨーク証券取引所で発生したノーザン・パシフィック鉄道の買収事件をきっかけに、後に<1901年恐慌>と言われる恐慌が発生し、関連会社は反トラスト法に抵触した。それまでは鉄道会社が、アメリカの産業を牽引し株式市場で大きな位置を占めていた。ノーザン・パシフィック鉄道はシカゴ・バーリントン・アンド・クインシー鉄道の買収に乗り出し、ユニオン・パシフィック鉄道と株の買い占め合戦を始めた。これに関与したのが、ジョン・モルガンとジェイムズ・ヒルのノーザン・パシフィック鉄道であり、ユニオン・パシフィック鉄道はウィリアム・ロックフェラーの後ろ盾を持つエドワード・ヘンリー・ハリマンであった。実にアメリカの大富豪長者番付のトップ30に入る4人の人間が、株式市場を画策した結果、恐慌を起こしたのである。巨万の富を稼ぐ資産家たちは、鉄道王ヴァンダービルト、石油王ロックフェラー、鉄鋼王カーネギーなど、各産業をほぼ独占支配し莫大な私財を蓄えていった。

2. 生い立ちとアメリカの夢

フィッツジェラルドの富への執着や女性観については、生い立ちの微妙な家族関係が影を落として見えるように見える。彼は、優雅な伝統を受け継いだ南部出身の父親を愛していたが、父の遠縁には、「星条旗よ、永遠なれ」(Star Spangled Banner, 1814)を作詞したフランシス・スコット・キー(Francis Scott Key)がいた。だが、父親は実務に恵まれず、一時P&G社の営業マンをしたが、彼が12歳の頃失業した。一家はミネソタ州セント・ポールで食品業を営む母方のマッキラン家(McQuillan)を頼って身を寄せた。祖父マッキランは、9歳でアイルランドから渡米、23歳でミネソタ準州のにわか景気に沸くこの町にやってきて、一代で財を成したビジネスマンであった。1877年、彼の葬儀には、町中が弔意を献じ、彼の創設したカトリック孤児院の子らが葬列に連なった。フィッ

ツジェラルドはこの祖父から「自信と栄誉ある野心を受け継いだ」(Turnbull, 4)ⁱⁱⁱ と言えるであろう。

セント・ポールには元来、知的職業に就く特権階級が存在した。だが、好景気が続くうちに、商業や銀行業を営む家柄が多数台頭し、フィッツジェラルドの成長期には、食糧・雑貨類や鉛管類・靴類などの製造業で蓄財した者たちが特権階級となった。街の中心サミット・ストリートには、ノーザン・パシフィック大陸鉄道を敷設し「帝国の建設者」と称えられたが、1901年恐慌の原因を作った鉄道王ジェイムズ・ヒルの邸がそびえていた。フィッツジェラルドは、少し外れたローレル・アヴェニューに住んでいた。

彼はいくつかの prep school に通い、学校新聞や雑誌に記事や物語などを掲載するようになった。しかし、同級生との付き合いや娘たちとのダンス・パーティを通じて、階級の壁を認識するようになる。プリンストン大学当時、夢中になったギネヴラ・キング (Genevra King) からはさりげなく別れを告げられた。誰かが「貧乏人の倅は、金持ちの娘と結婚することを考えてはいけない」と言ったらしい。(Turnbull, 72) フィッツジェラルドは『崩壊』(The Crack Up, 1945) に、有閑階級に対する根強い不信、憎悪を常に抱くようになったと書いた。「ゼルダを養えないから婚約を破棄された時、僕は友人たちの金がどこから来るのか考えずにはいられなかった。それは革命家の持っている信念ではなくて、百姓の胸にくすぶる憎悪であった。…僕は金持ちが金持ちでいることを許せなかった。…それが僕の全生涯と僕の作品を染め上げたのである」。(171)

しかしながら、彼は尊敬する師や友人に恵まれていた。ニューマンスクールの学長である神父フェイ、ライバルで助言者のヘミングウェイやリング・ラードナー、そして何よりも「知的良心」と頼むエドモンド・ウィルソンの存在が彼にこの意識を課し仕事を継続させたのである。結局、彼は大学を卒業せず、陸軍少尉の任官試験を受けた。その後兵役中に知り合った、ジョージア州最高裁判事の娘ゼルダ・セイヤーとの婚約は、経済的な理由で破棄された。だが、第一作『楽園のこちら側』(This Side of Paradise, 1920) がベストセラーとなって、彼女が結婚に同意したのだ。二人は1920年4月に、ニューヨークのセント・パトリック教会で式を挙げた。しかし、彼の生い立ちや、ゼルダに初め婚約を破棄されたことは、彼にとって生涯続くトラウマとなったのである。

3. 『夜はやさし』 第一次世界大戦の余波と精神科医

(1) 第一次世界大戦と世界地図の変貌

『夜はやさし』^{iv} は、1925年、夏のフランスはリヴィエラ海岸から始まる。若い女優ローズマリー (Rosemary) は、魅力的なアメリカ人夫婦、ディック (リチャード) とニコル・ダイヴァー (Richard & Nicole Diver) 夫妻に逢う。彼らの友人たちは、アル中の作曲家エイブ・ノース、フランス系アメリカ兵士のトミー・バルバンなどだが、ローズマリーはディックに恋の虜となる。フラッシュバックで、ディックは若い精神科医で、大富豪の父親と近親相姦で病んだ娘ニコルと結婚したことが語られる。夫と医師の役割の難しさから、彼は研究に怠慢になり、ニコルの実家の援助もあり、その生活スタイルの維持に汲々としていた。ローズマリーは、ディックたちとパリに行くことになる。しかし、彼女は、映画時代の産物、「性の商品化」の広告品にすぎず、小説はディックとローズマリーの恋が中心ではない。13章で彼らが第一次世界大戦のボーモン・アメル村から、ディベルの丘へと戦場を見学する時に、この小説の意図が明らかになる。

第一次世界大戦最大の激戦地ボーモン・アメルは、ソンムの戦いにおいて1916年7月から11月ま

で連合軍側の英軍・仏軍が独軍に対して塹壕戦を始めた場所である。7月1日朝、英仏両軍の歩兵は攻撃前進に移ったが、独軍の塹壕が堅固だったため攻撃は失敗に終わる。英軍は戦死者19,240人、戦傷者57,470人の損失を被り、戦闘1日の被害としては大戦中で最大だった。英軍は、兵士に30kgを超える重装備をさせたので、素早い突撃が出来なかった。その後、戦闘はこう着状態に陥り、最終的に約4か月半で死傷者は英軍419,654人、仏軍204,253人計623,907人で、独軍は465,000人から600,000人、合計百万人を超え、第一次世界大戦で最大の犠牲者が出た。この戦いで、連合軍はわずか11km余り前進しただけだった。

ポーモン・アメル攻略は特に連合軍の損害が大きかった。塹壕前の爆撃は攻撃の前兆なので、独軍は英軍を待ち構えることが出来た。そのため英軍29師団は進撃中に独軍の機銃に次々に撃たれ、敵の塹壕に全く辿り着けなかった。その後、第一ニューファンドランド連隊が投入されたが、30分後に連隊は壊滅した。突撃した753人の兵士のうち、死者300人以上、負傷者350人以上で、翌朝点呼に応えたのはわずか68人しかいなかった。

「ほら、あそこの小さな川まで、歩けばものの2分と経たないうちに行けます。それがイギリス軍はあそこまで行くのにひと月かかりました——ひとつの帝国がゆっくり前進したんです。前方では、どんどん人が死んでいき、後方からはじりじり押すといった具合に。別の帝国が一日に数インチずつ後退し、血まみれでボロボロになった百万もの亡骸を残したのです。我々の世代のヨーロッパ人は二度とこんなことを繰り返すことはないでしょう。」(49)

ここで物語は、ディックの個人的な解体と墮落、そして社会的な混乱や無秩序の双方を合体させるのである。つまり欧州大戦が、確実に安全に見えたヴィクトリア朝時代から、モダニティ（近代）の世界へ移行する残酷な事件として提示される。ディックは、第一次世界大戦が人類の歴史と行動パターンを大きく変化させた深淵な意義を説明している。

「これらの戦いは、ルイス・キャロルやジュール・ヴェルヌや、『水の精』の作者によって発明されたのだ。…これは最後の愛の戦いなのだ。」エイブは言う「君はこの戦いをD・H・ロレンスに譲り渡そうというのだな」(49)

ディックは、郷愁にかられて、これらの戦闘を、博愛主義や従来の価値観、先祖代々維持されてきた世界が遂行した戦いなのだと言いたかったのだ。歴史的なテーマは、ディックの父親の開拓時代やインディアン戦争・南北戦争にまで及ぶ。この作品のテーマは、偉大なアメリカの歴史小説ではなく、むしろ歴史について、作家の歴史観を劇化した偉大なアメリカ小説なのである。ディック・ダイヴァーの物語は、その歴史の縮図であり小宇宙である。

若いディック・ダイヴァーは、積極的で教養があるけれども、その矛盾を抱えて傷つきやすい。彼はロマン主義者であるが、自己修養を堅持し、道德感を強く護る。また、高度な教育を受け、エール大学を出てジョンズ・ホプキンスに学び、オックスフォードやチューリヒで研究したにも拘わらず、彼は、理想主義的で楽観的な若いアメリカ人として、まだ家族の開拓時代や父親の聖職者としての伝統を瑞々しく湛え、目を輝かせたカントリー・ボーイとして登場する。彼の胸は期待で膨らんでいるが、未だ自分の世界が、彼自身のというよりは、祖父たちの遺産の相続の延長であることに気づいていない。

ここでは、祖先の遺産が二元論的に存在する。一方はヨーロッパの祖先たちの格調高い知識と文明、一方はアメリカの理想を掲げた父祖たち、その対抗馬として欲望と退廃の続くアメリカの悪い父祖たちのエネルギーがある。

ダイヴァーは、複雑な主人公である。彼の英雄的な資質とその野心は、彼の周囲の墮落した世界によるだけでなく、時代遅れの戦前の理想主義によって擦り切れ、粉微塵に破壊される。彼が進むべき研究生活は、実際、アルコール中毒症により減速させられ、無名という忘却の淵に沈むことになる。彼の名前の示す〈潜水夫〉(Stern—*Cambridge Companion*, 2002, 101)は、一方で学問、規律、創造性や道徳観、心理学の泰斗となる野望などを表しているが、他方、崩壊、忘却、比喩的には、若者と張り合い、遊蕩に疲れたダイヴァーが波乗りに失敗するといった水泳のテーマにつながっている。

さらに、リチャード・ダイヴァー博士の生涯は、国際政治史に関する物語とも読める。彼は、朝の光のようなアメリカの理想主義を体現している。一方、ダイヴァーと共同でチューリッヒの診療所を開いたフランツの研究室は、午後の薄光の中で黴臭く、フランツの祖父やベスタロッチやエッシャー博士の像が見え、スイスの国民的英雄に囲まれている。当然、ダイヴァー側からの診療所設立の資金は、妻ニコルの実家ウォレン家の資産である。欧州の先進的な科学分野を実践する精神科診療所に、アメリカの New Money が侵入する象徴的な事例である。フランツはダイヴァーを「年とらないアメリカ人の顔だ」と言い、彼の若いエネルギーと対照的に、欧州は、衰退した古い貴族社会なのである。

(2) ディック・ダイヴァーの敗北

ディックは精神科医として、同僚フランツからも信用が篤かったが、性的墮落に根差した汚濁の世界ですっかり消耗し、無垢な美しさを絶望的に求めていた。彼の新しい愛に対する半狂乱の欲望の対象は、若いローズマリーに象徴され、それがローズマリーの物語をこの作品のプロットに不可欠な要素にした。ディックの愛は、単なる中年の危機ではなく、若い肉体に対する中年の欲望でもない。ディックは、ドン・キホーテ的な滑稽さを演じ、救う価値のない、そして救えない世界の救出に関わったという苦渋を感じている。彼がこれまであらゆる犠牲を払って解放してやった、患者で妻のニコルの、赤子のように新鮮で、楽天的な自由に対する彼の怒りは、嘲りや自己嫌悪によっても帳消しにならない。彼は初めにこのことを悟っておくべきだった。しかし彼は、ニコルに恋してしまうという不運に陥ったのだ。彼の世界や人生がどれだけ喜劇的になろうとも、最後の戦いで彼に残されたものは、ニコルを救うことに他ならなかった。しかも、彼はニコルとの結婚に際して深く傷ついていた。ウォレン家の財産を管理するニコルの姉のベイビィ・ウォレンは、「ニコルに医者を買ってやろうとしていた。利用できる立派な医者のお手持ちはありませんか？」(133)というわけだった。

だが、ディックは愛情にあふれて、ニコルの病状については大変慎重に、また忍耐強く観察し、彼女を導いていた。結婚して男児ラニアと女児トプシーが生まれ、幸せな家庭を築いているように思われる。しかし、彼女の嫉妬や抑圧が例の発作を起こすたびに、ディックの家族はバラバラになっていく。小説ではそのことが、SFのような緊迫感を持って迫り、抜け道が見出せない。第四部では、自分の娘を誘惑したと言う患者のひとりが書いたディック宛ての手紙を見つけたニコルは、ディックに食ってかかる。彼は、その患者は精神異常だと言うがニコルは承知しない。気分転換のため、彼は家族連れで博覧会へドライブに出かけた。しかし、ニコルは微笑を浮かべて車から降りると、一人で駈

け出していき、観覧車の中で大笑いしていた。人ごみの中を、ニコルの黄色いドレスを追っかけていたディックは、急いで子供たちの所に戻ると、近くの売店の女に二人を預けて、ニコルを探した。ようやくニコルを見つけた彼は、子供たちの所に帰ったが、ニコルは子供たちのことは考えたくないのだ。

彼らは激しい悲しみに打ちひしがれて帰途についた。車の中では互いに感じあう不安と気疲れで重苦しく、子どもたちはがっかりして口をきこうとしなかった。深い悲しみが、おそろしく暗く、今までに見たこともない色を帯びてにじみ出ている。

ディックは休みたいと思った。家に帰れば争いはすぐにも起こるだろう…精神分裂症。—ニコルには何も説明する必要のない人間と、何を説明しても受け付けない人間とが、代わる代わる現れてくる。(163)

ディックの破滅は徐々にはやってくるが、最終場面は大団円にふさわしい。ディックが職場での飲酒を咎められ職を辞すと、まもなく彼自身、暴力沙汰をおこして、警察に逮捕される。最終的な破滅は、ディックとニコルの最終対決である。ローズマリーが初めてディックのいる浜べに現れる前でさえ、ディックは自分が絶えずニコルを教育する必要性があると認めていたが、それが彼を空虚にし、かつての彼はすっかり萎縮してしまい、新しい愛に身を委ねたかった。だが、彼にはその失敗が自分にあると認識していた。なぜなら彼は世界のトラウマを癒すことができ、彼女の恋人として夫として、ニコルを治癒することができ、しかもその過程で自分は何ら被害を蒙らないと想像するほど、ロマンチックで愚かだったのだ。ダイヴァー医師は、ニコルが完全に治癒する決定的な行動を知っていた。それは、彼女にもう一つの性的転移を経験させることであった。つまり、彼が彼女の父親から彼へ性的な転移をさせて彼女を治癒したように、彼女を彼自身から他の男へ性的に転移させることなのだ。夫ディック・ダイヴァーは、ダイヴァー医師の知識に苦悶する。12年間という結婚生活の果てに、彼はニコルとの生活に、ウォレン家(彼女)の世界が彼にしたことに対して、憤りを感じていたことを思い出す。彼は、彼女が自分を取り戻すことが出来るように、彼女につらく当たり、彼女の自我を彼女に感じさせることに成功する。とは言え、「今となっては、彼にとって、彼の自己防衛的な職業的な離反と彼の心に浮かんだ新しい冷たさを見分けることは不可能になってきた。…彼は、自分がその支援を引き受けたウォレン家との生活に嫌悪感を持ち、ニコルに対して虚しさを感じるようになってきたのだ。」(145)

(3) ニコルの自立

小説のヒロイン、ニコルは、四か国語を話すことができ聡明で美しく、広い意味でゼルダに似ており、精神科医ダイヴァーと結婚する。彼女の引き立て役は、若い女優のローズマリーで、ニコルの敵役である。作家は、これらの二人の女性の視点を通して、ローズマリーは初章、ニコルは最終章で、ダイヴァーの破滅を描いている。初章は、リヴィエラ海岸で「父さん娘」で当たりを取った女優ローズマリーがダイヴァー夫妻を中心とした仲間を見て、ディックを魅力的な人物と思い、彼の声に「彼女の前に新しい世界を開ける」ように感じる。5年後、作品の最終章で、同じ浜辺で、ディックがローズマリーに示す虚栄心を蔑みながら、ニコルは遂に、ディックと離婚する決心をする。

ゼルダの症例を診た精神科医と長い手紙をやり取りしたフィッツジェラルドは、自分自身を精神病の「アマチュアの専門家」と考えていた。サラ・ビーブ・フライアー (Sarah Beebe Fryer)^v は、近

親相姦の犠牲者のもろさを把握していることに、フィッツジェラルドの性格描写を評価している。しかし、しばしばディックはニコルの狂気を誇張し、彼女の状況がトラウマの兆候として認められる時、自分の問題があるにも拘わらず彼女を責めているように見える。

ただし、ニコルの行動は読者にとって一般的な治癒過程で現れるものか、作家の創作によるものなのかの判断は難しい。精神病か否かの判断は難しいとしても、人間の自立、女性の自立という課題で、彼女の踏み迷った宇宙は、当時のフラッパーやその後の女性の課題から遠くない。

最初の発病から、彼女は新しい希望を抱いて立ち直り、多くの期待に胸を膨らませていたのに、ディック以外には生活の支えになるものもなく、穏やかな愛情を注いでいるようなふりしかできない子供たち、いわば親のある孤児たちを育てることしかできない。…彼女はディックを独り占めにしながらも孤独な生活を送っていたが、ディックの方では一人占めされることを好まなかった。…彼は何度も彼女をつないでいる手綱を緩めようとしたが、成功しなかった。(153-154)

ここで、女性の、或いは人間の独立心とは何か、という問いが湧いてくる。個人のアイデンティティは、どのようにして成立するのだろうか？ もし、ニコルに何か仕事があれば、それでも彼女はディックに頼りきりになるだろうか？ そこが、『グレート・ギャツビー』のヒロイン、デイジーについても言えることだ。フィッツジェラルドは、登場人物のニコルを<女>という観点からしか描いていない。彼女の場合は病気も考慮に入れなければならないが、彼女がディックからトミーに心を移した時、「この十年来初めて、彼女は自分の夫以外の個性に支配をうけることになった。トミーの言った言葉がことごとく、その時から永久に、彼女の一部となった」(246)という文章が続く。男をすべて受け入れる恋愛至上主義の甘い世界が、少々皮肉を込めて描かれているようである。だが、発作時以外は正常であろうと推測できるが、ニコルはよい母親として描かれてはいない。このことは、精神分裂症に典型的なことなのだろうか？ 本来ならば、子育てによって彼女は成長できたのではないかと様々な問いが浮かんでくる。

ディックは、専門家の研究書というより一般人のための通俗的な心理学書を書いて、徐々に専門家としては外れ、柔らかな路線に行く。そして、ニコルにも同じことを勧める。ニコルは初め彼に意義深い仕事をするように勧めるが、その反対に、彼女も快樂的になり、自分の選択を治療だと弁護する。彼女は楽しみのために買い物をし、情事を始める。ヴィクトリア朝社会の倫理観を拒否し、彼女は「気狂いピューリタンよりも正気のペテン師」(247)になる方がましと思うようになる。彼女は徐々に退行し最後には放縦に達する。その時ニコルは、彼女を<育む>繊細で弱い父親のような精神科医よりも、軍人的な男らしさの権化のような戦士トミー・バルバンを選ぶのだ。

(4) 映画「父さん娘」の人気—父親業・母親業の失墜

ディックが初めにニコル、それからローズマリーに逢った時、二人とも無垢の仮面をつけて、彼を誘惑したことを思い起こす必要がある。近親相姦の父と娘のテーマを持つ、ローズマリーの映画「父さん娘」は、血みどろな戦闘で幻滅を引き起こした第一次世界大戦後、大人が道徳や合理性、他人に対する責任から逃れ子供部屋に聖域を求めた、<文明の没落>のための中心的な隠喩であった。この当時、誰もがその天使のような歌声や姿に魅入られた子役のシャーリー・テンプル (Shirley Jane Temple, 1928-2014) を思い出すだけでよい。父親である男性が大人であることをやめて、少年にもど

り思い切り母親に甘えられる子供部屋の領域が居間にまで広がったことの証左である。映画「父さん娘」は、若者や快樂、そして両親や他の伝統的な権威の没落を理想化した＜大衆文化の興隆＞を表徴している。

父親業後退のイメージは、若者の道徳的な混乱に責任のある唯一のものではない。母親業の喪失も重大な課題である。ローズマリーは母親、エルシー・スピーアーズ夫人 (Mrs. Elsie Speers) を、「心地よい克己主義」を示す「一番の友達」(11)と考えているが、母親の助言は問題であり、彼女の男性的な名前が示すように攻撃的な男性の競争原理を暗示する。彼女はローズマリーに「あなたは結婚するというより、仕事をするように育てられたの」「あなたは経済的には、女の子ではなく、男の子なのよ」(35)と教え導くのだが、しかし、読者はなぜ、彼女は娘が肺炎になる心配を押しつけて、決闘を見に行かせ、結婚している男を追いかけるよう忠告するのかわからない。この作品は、父権制律法の葬送を賛美し、真の母親業の死滅を意味している。

究極的には、男性の挫折と社会的混乱が、たとえば、子供じみた女の誘惑か、男性的な女性の叱責という形で、女性の言動のせいにされる。作品の中で強硬な立場を崩さない女性のひとは、ニコルの姉ベス・エヴァン・＜ベイビィ＞ウォレンである。彼女はウォレン家の財産を管理しており、ディックを墮落に追いやり骨抜きにしてしまう。冷淡な独身女とされているが、ベイビィは、アメリカ文化の女性化の背後に存在する強大な権力の憑依として位置づけられる。暴力沙汰で拘留されたディックをローマの刑務所から出すために、彼女は領事につめ寄った。

「あたしたちはアメリカでは相当な身分のものです。」…「帽子を被って今すぐにあたしと一緒に来てください」…領事は帽子のことなど言い出されてぎょっとした。あわてて眼鏡をふき、書類をバラバラめくり始めた。そんなことをしたって何の役にも立ちたくない。「アメリカ女性」がたけりたって目の前に立ちはだかっているのだから。アメリカ人の精神的なバックボーンをへし折り、大陸全体を子供部屋と化しきったあのすさまじい非合理的気質は、彼などの手に負えるものではない。彼は副領事を呼ぶためにベルを押したーベイビィが勝利を収めたのである。(198)

「父さん娘」などに象徴される幼稚さという戦後の女性のテーマに、フィッツジェラルドは社会的なアイデンティティ・シフトを加えた。女性が自由になると、「もはや男の世界に存在する」だけでは満足しないことはフィッツジェラルドの歴史感覚らしい。しかし、自由になると、大人の責任と義務を振り捨てて無軌道で不道徳な世界に遊び、稚拙な無責任体制の中で行動しやすい。フィッツジェラルドはこのことを特に、戦後富裕層になった人間に顕著だと考えた。「君はお金がありすぎる」。トミーは気短かくニコルに言った。「それが問題の核心だよ。ディックはそれに我慢できないんだ」。(246)

富裕層の根本的に無責任な態度は、ニコルの父、デヴェロウ・ウォレンにも現れている。彼は、ドムラー博士に言う。「私は急いで国に帰らねばならない。後は、あなたに任せるから」。どんなにそれが大切な事であっても、このような無責任な態度は周囲の者の人間性を曲げ、欲望や権力や金力の道具にしてしまう。この無責任さは、ベイビィ・ウォレンに続く。ベイビィは、ニコルがダイヴァーと離婚すると決めた後、「ダイヴァー博士は結婚して6年ぐらいはとてもよい夫だったわ」と言う時、「彼はそうするように訓練されたのよ」(262)と返す。ベイビィは常に、金の力で「ニコルの治療をする良い医師を都合したい」(132)と考え、ウォレン家の責任を全うしたいと思っている。

むすび

小説『夜はやさし』において、フィッツジェラルドは、富裕層の無責任な態度、また彼らの振りまく非人間的な力が、周囲の人間を墮落させ、破滅に追い込むことを、ダイヴァー博士によって示した。しかし、だからと言って、ダイヴァーが単なる犠牲者でないことは明白である。彼は精神科の心理学者として研鑽を積む覚悟はあったが、患者を妻にする危険を冒してニコルと結婚した。ディックは、初めはウォレン家の富に手を付けず自分の生活を護ろうと努めたが、彼の研究生活や家庭は危うい均衡の上に保たれていた。診療所の建設や維持管理、絶壁に立つ別荘建設などに投入されたニコルの富がディックを苛み、富の力が徐々にその均衡を崩した。それは、ニコルのパリでの桁外れの買い物や、リヴィエラ海岸に戻る一家の旅行風景に示される。ディックは家族と家族のメイドや犬や犬の世話係の他に、山のような数のトランクを駅のホームに降ろさせる。まるで、大名行列だ。時間と手間のかかる富裕層の生活はそれだけで研究生活とは相容れず、このようにしてダイヴァー家は、単なる金持ち一家と成り果てる。その背後には、大量生産と大量消費社会が、そして欲望を呼び覚ます広告業、映画産業やファッション界の隆盛がある。ディックの物語は、ウォレン家の富に溺れた男を描いただけではなく、20世紀初頭以来アメリカ社会に特有の、空恐ろしい富の力の化学作用を取り込んだ、心理小説なのである。おそらくこの小説の構成の強さは、アメリカ社会の近代化とそれに巻き込まれた個人の運命を表現したところに在るのであろう。登場人物は単なる〈楽園からの亡命者〉ではなく、フィッツジェラルド同様、〈近代化〉社会の痛みを分け合った人間である。それ故、この作品もまた、フィッツジェラルドのアメリカの歌であり、アメリカの夢の滅亡を謳った叙事詩なのである。

注

- i Mayfield, Sara. *Exiles from Paradise: Zelda and Scott Fitzgerald*. NY Delacorte Press. 1971
Mellow, James. *Invented Lives: F. Scott and Zelda Fitzgerald*. Boston Houghton Mufflin, 1984
Meyers, Jeffrey. *Scott Fitzgerald: A Biography*. New York: HarperCollins, 1994
*1999年、モダン・ライブラリーの編集部が選出した「英語で書かれた20世紀の小説ベスト100」で、2番目がF・スコット・フィッツジェラルドの『華麗なるギャツビー』である。
- ii エマニュエル・サエズとトマ・ピケティの共著論文のデータ



See Thomas Piketty and Emmanuel Saez, "Income Inequality in the United States: 1913-1998," *Quarterly Journal of Economics*, February 2003, or, for a less technical summary, see <http://elsa.berkeley.edu/~saez/saez-UStopincomes-2007.pdf>. Their most recent estimates are available at <http://elsa.berkeley.edu/~saez/TabFig2008.xls>.

- iii Turnbull, Andrew. *Scott Fitzgerald*. NY: Grove Press, 1962
- iv 小説『夜はやさし』は、1934年1月から『スクリブナーズ・マガジン』誌に連載された。単行本は1934年4月に出版されたが、恐慌下で読者の関心は薄かった。作者は不人気の原因を小説の構成などにあると考えた。初版は、ローズマリーがリヴィエラに来るところから始まるが、1939年、作者は、初版の3部構成を5部に分け年代順に場면을配列することを考えた。この意図が実現せぬまま、作者は死去し、1951年、マルカム・カウリーがこの方向で改訂して出版した。本稿では、初版を継続した Wordsworth Classics を使用し、引用文は、谷口陸男氏を参考にして筆者が翻訳した。
- v Fryer, Sarah Beebe. *Fitzgerald's New Women: Harbingers of Change*. Ann Arbor, MI: UMI Research Press, 1988

[参考文献]

- Fitzgerald, Francis Scott: *The Great Gatsby* (Scribner 1925, 1953)
: *This Side of Paradise* (Dover Publications, inc. 1996)
: *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald* edit. Bruccoli (Scribner 1989)
: *Tender is the Night & The Last Tycoon* (Wordsworth Classics 2011)
: *Collected Stories of F. Scott Fitzgerald* (NY Barnes & Noble 2007)
- Stern, Milton R.: *The Golden Moment—The Novels of F. Scott Fitzgerald* (University of Illinois Press 1970)
- Bruccoli, J. Matthew: *Some Sort of Epic Grandeur* (UP South Carolina 1981)
- Edit. by Harold Bloom: *Modern Critical Interpretations F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby* (Chelsea House Publishers 1986)
- Lehan, Richard: *Twayne's Masterwork Studies—The Great Gatsby The Limit of Wonder* (NY: Twayne Publishers 1995)
- Berman Ronald: *The Great Gatsby and Fitzgerald's World of Ideas* (Yuscaloosa: University of Alabama Press 1997)
- Schiff, Jonathan: *Ashes to Ashes—Mourning and Social Difference in F. Scott Fitzgerald's Fiction* (NJ: Associated University Press 2001)
- Edit. by Ruth Prigozy: *The Cambridge Companion to F. Scott Fitzgerald* (Cambridge University Press 2002)
- Veblen, Thorstein: *The Theory of the Leisure Class* (Oxford University Press UK 2007)
- 谷口陸男訳『夜はやさし』(角川文庫 2008年 改訂版初版)
- 野崎孝訳『グレート・ギャツビー』(新潮文庫 1974年, 1994年 51刷)
- 村上春樹訳『グレート・ギャツビー』(中央公論新社 2006年)
- 永山篤一訳『ベンジャミン・バトン 数奇な人生』(角川書店 2009年)
- 小川高義訳『若者はみな悲しい』(光文社 2008年)
- 村上春樹訳『冬の夢』(中央公論新社 2011年)
- 森川展男『フィッツジェラルド—愛と彷徨の青春』(丸善ブックス 1995年)
- 英米文化学会編君塚淳一監修『アメリカ1920年代の光と影』(金星堂 2004年)
- 小林由美『超・格差社会アメリカの真実』(日経BP社 2006年)
- 村上春樹「フィッツジェラルド ジャズエイジの旗手」『世界の文学39』(週刊朝日百科 2000年)
- ミルフォード, ナンシー『ゼルダ—愛と狂気の生涯』大橋吉之輔訳(新潮社 1974年)
- 野崎孝編『フィッツジェラルド—20世紀英米文学案内 7』(研究社 1988年 10版)

(うえの かずこ 総合教育センター)